

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

現代においては①「待つ」という時間に対して、だれもが注①不寛容ふかんようになっていると思われるのではない。そういう私自身がそのようなのである。

東京の山手線はすごいと思う。ほとんど五分と間隔かんげをあげずに、次の電車がやってくる。朝のラッシュ時など、どの駅にも一台ずつ電車がとまっているのではないかと思うほどである。あの長距離ちやうきよりを走る新幹線でも、多い時間帯は十分と間隔が空いていない。私たちは、そんな待ち時間に慣れてしまった。

かつては、バス停で十分や十五分待つのはふつうのことであったが、このごろの京都の市バスなどは、次のバスがどこまで来ているかを表示してくれる。ありがたいことだが、乗客が待つという時間に対して、たえる力が減退しやうたいしているということの証拠しやうことも言えよう。

待つというストレスから②カイホウかいほうされ、便利になったのだから文句を言う筋合すぢあいはないのだが、ちよつと待てよと思わなくもない。それは情報を得るスピードに関するものである。近年、私たちのまわりで、もつとも大きく変わったのがインターネットの普及ふきやうであることはまちがいないだろう。インターネット環境かんきやうが③ゲキヘンげきへんし、コンピュータからだけでなく、スマホからも簡単にアクセスでき、私たちは、どこにいてもインターネットにつながっている。

インターネットの普及によって、必要な情報が、とにかくすぐ手に入るようになった。ある一つの言葉を調べるために、分厚い辞書を本だなから持ち出してきて、そのページをめくるというような面倒めんどうな手続きを経ることなく、目的とする単語にネットはすぐさま接続してくれる。ある事件を調べるために、図書館に行つて、関係資料を持ち出すという手間をかけなくとも、ネットの情報でアウトラインをつかむことはほとんどの場合可能になっている。

いまや情報や知識を得るために必要な時間と手間は、ネット普及前にくらべて、比較ひかくにならないほどに少なくなっている。まことに手軽になり、高い辞書を買うことも、図書館まで調べに行くことも、ほとんど必要ないまでに手軽になってしまった。

④これをだめだという自信は、私にはない。ないが、それでいいのかも思う。

私がおそれるのは、第一に、⑤「知」へのリス・ペクト（尊敬）の念に、大きな変更をせまることになるだろうということである。諸橋轍次の『大漢和辞典』を引くとき、新村出の『広辞苑』を引くとき、その行間に、私たちははつきりとは意識しないまでも、これを休まない努力の末に完成させた人の存在を、かすかに感じているはずである。その恩恵をこうむっているという意識は、それが必ずしも⑥カンシヤにはつながらないまでもどこかで感じているだろう。

あつけなく情報が入ってくるネットでは、そしてだれがそれを書いたのかがはつきりしないような説明文からは、そのような「知への尊敬」の念はほとんどわいてこないというのが実感である。「知」というものがなんとなく入ってくるという前提からは、「知」の開拓のために自らの人生をかけてみようなどという若者が生まれるとは考えにくい。

いま一つの問題と私が考えるのは、「知」へのアクセスの注²直截性である。グーグルにせよ、ヤフーにせよ、検索エンジンにまことに見事に、知りたいと思う情報に私たちを直接導いてくれる。時間のむだもなく、まことに⑦である。

⑧、この「知」への着地の仕方には、実はなんの⑨おもしろみもないと、私などは思うのである。本がほしい。本屋に行つて、なかなか見つからない一冊の本を探す。図書館でも同じであろう。そんなとき、探しているのはちがうものだが、背表紙を見てとても興味を引かれて、思わず買ってしまったなどという経験は、多くの人にあつたはずだ。

この⑩式の、偶然の出会いという形での「知」への遭遇は、ネット環境下では、まず起こりえないものだろう。一直線に、いま求めている情報へと私たちを導いてくれる。アマゾンで本を注文すれば、ほしい本だけが見える仕組みになっている。意識の外側にあつて、ふだんは現れてこないのだけれども、背表紙を見ていて不意に自分の別の興味に火がつくといった形での、「知」へのアクセスの仕方、実は読書や調べものの楽しみは、こんな思わず入った横道での出会いこそあるのかもしれない、と私は思っている。

「待つ」という時間にたえられないでなす知識や情報へのアクセスは、⑦ではあるが、はばということからはきわめて限定的と言わざるをえない。読書の豊かさといったものは、そんな寄り道こそあるのだから。

ケータイメールやツイッターは、独断の^{注3}、そしりを^{かくこ}覚悟でいえば、「思考の断片化」^{だんぺんか}を促進する^{そくしん}という危険性を持っているのではないかと、私は思っている。

だれかからのメールが届くと、打てばびびくようにそれに返信をする。すぐまた別の友人からのメールが届く。まったくちがった内容であろうが、それにも返信をする。そのようなすぐさま多くのメールへ対応するという習慣は、私たちから一つのことをじっくり考えるという習慣をうばってしまう危険性を持っている。それは⑪「自己へ向かう」という大切な時間をうばってしまうものでもある。

「思考の断片化」もおそろしいが、気がつかないうちにおちいってしまう、もう少し「ヤバイ」危険性は、すでにある考え方のわくの中に自分をおしこめてしまうことなのかもしれない。

自分だけが感じたことを伝えるためには、万人の共通感覚の表象である形容詞にたよらないことは、基本中の基本である。

この形容詞のもっとも現代的なバージョンが、絵文字というものであるかもしれない。絵文字、顔文字など多くのものが使われており、悲しいという表情だけでも、何十種類もあるらしい。時おり人からもらうメッセージにこんな顔文字が入っていたりすると、それはなかなか楽しいものではある。

文章のアクセントとしては、その意味はあるだろうし、思わずほおがゆるむということも効果の一つであろうが、一方で^⑫感情表現がこのような既成の^{きせい}絵文字によって代えられてしまうことは、やはりまずいのではないかと私は思っている。絵文字にせよ、顔文字にせよ、それらは多くの人たちの、ある感情の最大公約数であろう。形容詞のもっとも一般化されたものと言っていいかもしれない。

メールの長さの制限から、そのような顔文字を使うのは、効率的であることはまちがいない。しかし、自分の今の考えや感情を、どの絵文字を使えば、いちばん近いだろうと選ぶ作業は、自分の感情をどう表現しようかというよりは、すでに用意されているパターンのどれに当てはまるかを選ぶ、当てはめる作業にすりかわっているのだとも言える。

最大公約数としての絵文字にすり寄り寄るような形で自分の感情を整理してしまうことは、自分という、他にはないはずの存在に対

して、あまりにも^⑬ムセキニンな対応ではないのかと思うのである。たぶん、〈私〉は、それらあらかじめ用意されたどれともちがう「悲しい」をいま感じているはずなのである。それらをほり起こしてやらなければ、自分がかわいそうではないだろうか。絵文字を受け取って楽しいと思う感情とは^⑭ウラハラに、私はそんなありきたりのパターンに当てはめられてしまう対応がきらいである。

『知の体力』永田和宏

注1 不寛容・・・広い心で受け入れようとしないうこと。

注2 直截性・・・まわりくどくない状態。

注3 そしり・・・非難すること。

問一 ——部①『待つ』という時間に対して、だれもが不寛容になっている」について、わかりやすく言いかえるとどういうことですか。解答らんに合うように、文中の言葉を使って十二字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

待つということに ということ。

問二 ——部②・③・⑥・⑬・⑭のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 ——部④「これ」の指す内容を文中の言葉を使って五十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問四 ——部⑤『知』へのリスペクト(尊敬)の念に、大きな変更をせまることになる」とはどういうことですか。解答らんに合うように、文中の言葉を使って七十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

たとえば、知識や情報の宝庫である『大漢和辞典』や『広辞苑』を ということ。

問五 [] 部⑦(二か所)に当てはまる言葉を次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 意欲的 イ 効果的 ウ 一方的 エ 計画的 オ 効率の

問六 [] 部⑧・⑩に当てはまる言葉を次のア～カのうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア あるいは イ さらに ウ しかし エ すなわち オ たとえば カ ところで

問七 ——部⑨「おもしろみ」について、筆者の言う「おもしろみ」に当てはまらないものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア なかなか見つからない一冊の本を探し回ること。

イ 探しているのはちがうものに引きつけられること。

ウ 知りたいと思う情報へ一直線に導いてくれること。

エ 不意に自分の別の興味に気づき情熱が高まること。

オ 思わず入った横道で予期せぬものに出会うこと。

問八 [] 部⑩に当てはまることわざとして最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一を聞いて十を知る イ 門前の小僧習わぬ経を読む ウ 二階から目薬 エ 犬も歩けば棒に当たる

オ 月とすつぽん

問九 ――部⑫「感情表現がこのような既成の絵文字によって代えられてしまうことは、やはりまずいのではないか」について、

その理由を説明した次の文の中で、筆者の意見として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 既成の絵文字は、ある感情の最大公約数であり、形容詞のもっとも一般化されたものなので、自分の意見や感情を表したものに、他人の表現を借りている気がするから。

イ 自分の考えや感情を、絵文字というありきたりのパターンに当てはめるだけの作業は、結局、自分の本当の考えや感情をほり起こし、表現したことにならないから。

ウ 既成の絵文字を使うことで、効率よく相手に自分の考えや感情を伝えようとしているのに、ぴったり合うものを選び取る作業に時間と手間がかかってしまうから。

エ 絵文字は、文章のアクセントとして使え、受け取り手に楽しんでもらえるが、パターンに限りがあり、本当の自分の考えや感情を伝えられないから。

オ 既成の絵文字は、種類は豊富でも、万人の共通感覚を表現したものなので、受け取り手が送り手の考えや感情を正しくとらえず、誤解するおそれがあるから。

問十 現代社会では――部①『待つ』という時間に対して、だれもが不寛容になっている」とあるように、待つこと、待たされることは価値がないと考えられることがあります。しかし、待つこと、時間をかけることの大切さを感じることもあります。「待つことや時間をかけることに価値がある」と感じられるのは、どのような場合がありますか。百五十字程度で書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記を一部変えています。)

「わたし」には、十七歳で詩人として華々しくデビューした六つ上の姉がいる。

がんばっているのに。

そういうふうに自分を正当化しようとするのは、①ものすごく大きい。かつこわるい。それこそ自意識過剰だと頭では理解しているのに、ついひがみつぼくなってしまふのはどうしてだろう。

十七歳で、姉は詩人になった。片や、わたしはなににもなれていない。姉の詩の②ヒョウバンがよくても悪くても関係ない。わたしなんて、ただの一字も書けていないのだから。

ぐおん、とオーブンがうなった。温度を調節するためののか、炎がひっきりなしにいつたり消えたりしている。わたしは汗ばんだ額を手の甲で拭った。

③ふいに、泣きたくなってくる。姉にできないことをこつこつと積み重ねようとしたところで、しよせんは自己満足なんだろうか？ そつなく器用に立ち回つても、大切なものは結局なにも手に入らないんだろうか？ それよりもまず、大切なものつて一体なんだつけ？

鼻の奥がつんと痛む。いっそ泣いてしまいたいののに、涙は出てこない。かわりに汗が一粒、あごを伝って床にこぼれた。

「いいにおい」

振り向くと、姉がキッチンをのぞいていた。わたしの横に寄ってきて、同じように床へうずくまる。

④姉には、泣きたくなるときなんてないのだろう。

二作目の発表後、両親はこつそり文芸誌を買い集め、わたしはインターネットを駆使して、世間の反応を確かめた。意味はないとわかってはいても、そうせずにはいられなかった。姉さえいなければ、と鬱々と思いつめながらも、ざまあみろと笑い飛ばせず、

好意的な意見をこそこそと探していたあたりに、言ってみればわたしの限界があったのだろう。それにひきかえ本人は注達観したもので、家族のむだな試みに加わる気配はなかった。

「⑥もうすぐだね」

オーブンのタイマーは残り三分を示している。姉のひじが、わたしのひじにふれた。ひんやりと冷たい。

「うん」

わたしは下を向き、まばたきして息をととのえた。デジタルの数字が健気けなげに一秒ずつ小さくなっていく。

「おめでとう」

姉がいきなり言った。

「え？」

「お誕生日」

困ったように首をかしげ、姉は続ける。

「それを言い、来たんだった。蚊かにさされて忘れてた。ごめん」

「蚊のせいで妹の誕生日を忘れるって、どうなのよ」

⑥わたしはつぶやいた。声がかすれていた。たかが誕生日、祝うほどのものじゃない、とついさっきまで心の中で唱えていたにもかかわらず。

「しかも今日じゃないし。来週だよ」

「わかってるよ。もうすぐだね、って言ったでしょ」

姉は⑦ベンカイし、

「でも、今日みたいな日だったんだよ」

と続けた。

「よく晴れてて、暑くて、だけど空が青くて気持ちよかった。今朝、急に思い出したの。ずうっと昔のことなのに、はつきり覚えてる」

だって、すぐくうれしかったから。

姉が目を細めてしめくくった。クッキーの焼きあがり知らせる電子音が、キッチンに響き渡った。

こんがりと焦げめのついたクッキーを、姉はもりもりと食べた。顔のわりに横幅の広い口をさらに大きく開き、まだかすかに湯気を立てているハートや星をほおばっている。

「おいしい、おいしい」

上機嫌で言う。

「ねえ、お菓子屋さんになれば？ になれるよ、これは」

姉の得意技だ。おだてるでもなく、喜ばせようというのでもなく、なれる、と独断で言い切る。

「なれないって」

わたしはもう、小学生の頃のように、姉のほめ言葉をうのみにはしない。中学生の頃のように、適当なことを言わないでよと食ってかかったりもしない。特にお菓子屋さんになりたいわけではないし、たまたまこの場でひらめいた思いつきに過ぎないと⑧。シヨウチもしている。

⑨。それでも心のどこかで、本当になれるように思えてくるのは奇妙なことだ。

「そうかな、なれると思うけどな。このクッキー、おいしくて元気が出てくるよ」

わたしも、いつか、なにかになれるだろうか。詩人か、お菓子職人か、それとも他のなにかに、なれるのだろうか。

「詩、書いてる？ 最近」

「ええと」

姉の声が小さくなった。

「あんまり、かなあ」

弱々しい口ぶりにぎよつとした。姉らしくもない。

⑩「いっぱい書きなよ」

なにかにせきたてられるように、わたしは言った。それだけでは足りない気がして、クッキー差し入れるよ、とつけ加える。

「元気が出てくるような、おいしいやつ」

わたしには⑪センモンテキなことはよくわからない。姉をかばうつもりもないし、正直に言って、姉の詩がどう優れているのかも説明できない。ただ、わたしが読む限りでは、二冊の詩集のどちらにのっている詩も、等しく姉の声だった。文字を追っていると、耳もとでささやきかけられている気がした。散歩中になにかおもしろそうなものに出くわしたとき、いつもそうしてくれたように。

姉はたぶん、目に映ったものを無心に綴っているだけだ。そこによけいな⑫感傷はない。退屈も、憂鬱も。

「せつかくだから、これ、ちよつと書いとく」

「これ？」

「うん。このクッキー」

メモ帳を膝の上に開き、鉛筆を走らせはじめる。

「どれどれ」

わたしはテーブルの向こう側へ回った。半ば冗談、半ば本気で、姉の肩越しに手もとをのぞきこむ。

姉の書いたものを、読みたかった。⑬文字のかたちになった姉の声を、聞きたかった。

「だめ。恥ずかしい」

姉がメモ帳をぱたんと閉じる。前のページがめくられて、びつしりと書きこまれた細かい鉛筆の文字が見えた。

「見せてよ。このクッキー、わたしが作ったんだし」

「やだってば」

「題名はどうする？ おいしいクッキー？ 愛情クッキー？」

「なんだか笑いがこみあげてきた。わたしをちらりと見上げた姉も、くすぐったそうに微笑ほほえんだ。それから明るく澄すんだ声で、

「いもうと」

と、言った。

『ぱりぱり』瀧羽麻子たきわあさこ

注 達観・・・何事にも動じないこと。

問一

——部①「ものすごくください。かつこわるい」とありますが、「わたし」は何を「ものすごくください。かつこわるい」と思っているのですか。それを説明した次の文の□部A・Bに当てはまる言葉を、それぞれ指定した字数で文中からぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

「姉」と比べて

A (十字)

「わたし」自身であるが、

B (七字)

と正当化しようとすること。

問二

——部②・⑦・⑧・⑪・⑫のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問三 — 部③「ふいに、泣きたくなってくる」とありますが、このときの「わたし」の気持ちを説明したものと最も適当なもの^アを次の「オ」のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「姉」と自分の努力の仕方を冷静に分析し、自分がやり方をまちがえてしまったことをくやんでいる。

イ これまで「姉」に負けないようにたくさん詩を書いてきたのに結果が出ず、自分にいらだっている。

ウ 「姉」にできないことに取り組んできたが、要領よくふるまうことができない自分を情けなく思っている。

エ 「姉」に自分を競争相手として認識してもらうためにはどうすればよいのかわからず、途方に暮れている。

オ 「姉」を意識して自分ができることを考えてきたが、そもそも何をしたらよかったのか思いなやんでいる。

問四 — 部④「姉には、泣きたくなるときなんてないのだろう」とありますが、「姉」のどのような態度が「わたし」にそう思わせるのですか。それがわかる一文を文中からぬき出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問五 — 部⑤「もうすぐだね」とありますが、この言葉について説明した次の文の部A・Bに当てはまる言葉を、それぞれ五字以上十字以内で考えて書きなさい。(句読点に入れません。)

「もうすぐだね」という「姉」の言葉を、「わたし」は部Aの「」の「もうすぐだ」という意味で理解していたが、「姉」は部Bの「」が「もうすぐだ」と言ったつもりだった。

問六 — 部⑥「わたしはつぶやいた。声がかすれていた」とありますが、このときの「わたし」の気持ちを四十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問七 — 部⑨「それでも心のどこかで、本当になれるように思えてくるのは奇妙なことだ」とありますが、「わたし」が「本当になれるように思えてくる」のは、「姉」のふだんの言葉がどのような言葉であるからだと考えられますか。文中の言葉を使って三十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問八 — 部⑩『いっぱい書きなよ』なにかにせきたてられるように、わたしは言った」とありますが、このときの「わたし」の気持ちを五十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問九 文中において、「わたし」はどのような人物として描えがかれていますか。「わたし」の人物像を説明した文として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周りに「姉」と比べられ、他人にどう見られるか常におびえている臆病おくびょうな人物。

イ 自分とはちがって、努力せずに詩人になった「姉」に嫌悪けんおかん感を持つ心が狭せまい人物。

ウ 詩人になった「姉」と自分を比べてしまい、なかなか自分に自信が持てない人物。

エ 詩に関しての知識を多く持っており、「姉」が書く詩に対して深い理解を持つ人物。

オ 自分をはげまそうとしてくれた「姉」の思いに、応えたいと考える真面目な人物。

問十 — 部⑬「文字のかたちになった姉の声を、聞きたかった」とありますが、「文字のかたちになった姉の声」とは何ですか。五字以内で書きなさい。

問十一 本文を通して、「わたし」の「姉」に対する見方はどのように変化しましたか。解答らんに合うように書きなさい。

「姉」を十七歳という若さで詩人になった達観している人だと思っていたが、